

## 社会学における類推の問題

### —比較方法に関連して—

安西文夫

社会学において「比較方法」の問題は、この学問の成立とともに古いともいえよう。社会学が「市民社会の自己意識」として、その存在と来歴についての自覚と正当化を課題として成立するについては、一面においては近代社会の歴史的形態としての「市民社会」を中心とする絶対視があった。特に絶対主義的国家との角逐において勝利をおさめた社会は形態において最高至上のものとして、また歴史上発展の極致を示すものとして、理想化されねばならなかった。課せられたこの使命は初期社会学の展開を通じて終始固有のものであった。ところでこの絶対視が「比較」を含意するように思われることがある。最高至上の主張はそれが何に比較してのことであるのかの問題がそこにはある。発展の極致というならば、そこに到達する道程における社会の諸形態の存在を否定するわけにはゆかないであろう。というよりも市民社会を理想化するためにも、それと異なる社会諸形態との対照が必要となる。市民社会の絶対視はその蔭に、それについての相対的な見かたを包含せざるを得なかったわけである。

とはいえ初期社会学における比較の方法は、論理的な意味で充分の条件をそなえるそれではあり得ない。市民社会

の絶対視の奥ふかく比較への指向が潜在するにしても、またこの絶対視がまずあって、それを介して相対主義的な見かたが比較の方法を手がかりに展開されるにしても、絶対視そのものは比較の方法の成立のまゝに大きく立ちふさが  
る。見かたが主観的であればあるほど、また自己中心的であればあるほど、客観的な認識の展開はばまれる。社会学も学問の他の諸領域と同様に、その成立当初は自己中心的であることをまぬかれ得なかった。J・ピアジェは「人間にとつてもっとも自然に出てくる思想の傾向」として「自分が世界の中心に位置していると考える傾向」と「自分の行為の規制や習慣を、他人にあてはめ、一般的な普遍的なノルマにしたてあげる傾向」を指摘する。独善的であることは思考活動の初期の一般的傾向であるのかもしれない。ピアジェはこれを比喩として充分意識しながら科学について言う。「科学をつくりあげるためには、このような初期の『中心化』から出発してはならない。いわんやこの中心化の上に個々の知識をつみあげる、というようなやりかたで出来あがるものではない。知識の量がふえるにしたがつて『体系化』がおこなわれなくてはならない。ところで客観的体系化の最初の条件として、どうしても必要なのが  
出発時に主流であった自己中心的見地を棄てて、『脱中心化』をなしとげることである。この脱中心化があつてはじめて『比較』方法の態度が確立される。」(1:135)「なお、括弧内のセミ・コロンの前の数字は本論文末の関係文献に頭書された番号、後の数字はその引用または関連頁数を示す。以下同じである。」

脱中心化とそれを前提とする比較方法の展開によつて、社会学的認識は客観化され、社会学史の幾頁かが、それを追求する苦斗に濃くいろどられる。しかし初期社会学の場合はまだ比較も客観的体系化も、さらにはその前提をなす脱中心化も現われない。逆に自己中心的な見かたへの固執しかない。その視角から行われる概念や理論の究明の論理的基礎は充分の条件をそなえた比較ではあり得ず、依拠し得る唯一の根拠が「類推」に求められる必然性があつた。成立後、間もない学問が研究対象としてかちとつた領域を観察し、何らかの一般化を試みるのに、他の学問において達成された知見や法則を借用したり、一般に是認され、人気を博した見かたを利用したりするのはむしろ常套手段で

ある。しかもそれらの既製品としての概念や枠組が、初期社会学に課せられた使命に即応し、自らの主張に好都合であり、親近で伝承的な、しかも権威あるものに訴える快適、そこから生ずる説得の巧妙が学問の市民権確認にも役立つものならば、類推の誘惑は強烈な魅力をともなったであらうし、類推の仕かける畏の危険に警戒心をもつ配慮も鈍ったであらう。啓蒙期に優勢であつた機械論のないし分子論的な時代思潮のあとをうけて、十九世紀は生物学的ないし有機体的な考えかたの時期であつた。そのような雰囲気の中で生れた社会学は、生長の後ば身をもつて、そのような風潮の原点の一つとなる。初期社会学は徹底して類推の虜となり、類推こそはこの学問の方法論的中枢の位置を占めるのである。(2)

## 二

初期社会学の類推への依存を典型的に示す例としてハーバート・スペンサーの場合を見てみよう。スペンサー社会学は一方では原始社会から近代社会にいたる歴史的發展に關する包括的な一般理論をめざし、そこではこれら兩社会形態を一本の直線上に並べ、その両極に位置づけられる「軍事型社会」と「産業型社会」を対照させるが、これは「比較」ではなくして、後者をのみ美化するための表現手段でしかない。他方、人類学ないし民族学および今日いうところの歴史社会学の領域を含む規模大な体系は「社会学のデータ」に裏づけられる類型論を含むが、含意的に比較の問題にかかわらざるを得ない。しかし問題の中心はつねに「市民社会」にある。十九世紀イギリス自由主義の指導的なイデオログとしての世界観を中心としてしか社会を見ることができなかった。市民社会に対する彼の一体感、社会現象についての客観的觀察をばんだのである。比較の問題は論理的に充分の条件をそろえて成立せず、類推がもつぱら活躍することになる。「社会学原理」の中核をなす章の標題「社会は有機体である。」はそのことの明確な宣言であつた。

まず有機体としての社会は生物学的な個体有機体に、その成立の原理を提供される点で両有機体は相即のものである。両有機体が共通にもつ属性に見られる類似は一、小集会から大集会への量的増大、二、単純な構造から複雑なそれへの生長、三、それに伴う連帯の増大、四、固有の生命の維持、に見られる。しかし両有機体は、社会有機体が、一、外的な形態を有しないこと、二、その成員が分散的であるのに生物有機体の生活組織が相互関連の一体をなしていること、三、前者の成員の移動性と後者の構成要素の位置の固定性、四、前者の成員の全部が感受性をもつが後者では特殊化された組織に限定される、という諸点において異なる。しかもこの差異はとりもなおさず社会有機体の優級であることを示すのであって、有機体の性格はそこでさらに純粹なものとして強められると見られるのである。

社会の秩序と調和の原理である有機体的性格は、発展の原理としての自然生長性および適者生存の原理を含む社会ダーウィン主義の考えに、まことにうまく接合する。もともと適者生存の構想は、スペンサーによって、チャールス・ダーウィンに先立って着想され、後者によって普及された進化論を社会的次元で展示することをスペンサーは自らの課題としたといわれる。(3:30-37)

### 三

ここでしばらく類推の論理学的性格について考えてみたい。類推とは或る対象領域についてすでに得られた認識をこれと質的に異なる他の対象領域に転用することである。次元の低い領域に関する認識が利用されることが多いが、逆の場合もあって、問題の領域の属する次元の序列とは必ずしも関係がない。一般的に類推は既成の認識が転用される対象領域の特殊性を無視し、それに固有の認識の成立を阻止する役割と、その対象領域とは次元を異にして必ずしも妥当しない認識をもちこむことによって、誤謬、附会、歪曲を生ずるそれとの二重の消極的役割をもつ。論理的作業としての演繹がこの種の形態をとり易いというのは、特にこの種の推論形式が魅力あるものであることを物語る。

われわれの認識を終極的には崩壊にみちびく毒をふくみながら、類推はわれわれを誘惑する。未知の世界を前にして不安を覚え、それについて知る労苦を味あうよりも、すでに習熟した言葉や手法によって容易に理解が深められるのであれば、これほど結構な話はない。すくなくとも、それらの言葉や手法は親近なものであるので、われわれの不安や労苦は、この親近感の圏内にとりこまれ、その中にとけこむ。或るプラグマティストにとって科学的説明は、疑われている現象を、疑っている人にとって親しく、したがってすでに疑われなくなっているものに連結すること、すなわち「親近なものへの還元」を意味する。「説明の本質は、或る状況をわれわれがきわめて親近であるため、当然のこととして承認し、したがってわれわれの奇異の感が鎮静している要素に還元することにある。」(ブリッジマン) (4:430) しかし「親近なものへの還元」は類推を正当化するどころか、逆に原始感情に訴えて、おなじみのステレオタイプに接近させるといふ、科学的認識に対する武装解除をしか意味しない。ヘンペルも指摘するように、或る人にとって親近なものは他の人にとって親近でないこともあり、それへの還元が説明になり得る場合は相対的であるばかりでなく、親近であるものをこそ説明の対象とすることに、ほとんどすべての分野の科学が努力を重ねて来たのであり、しかもその場合、理論的概念や枠組というような、むしろ親近でない手段に訴えて行われたことが思いだされる。(4:430-431)

質的差異の溝渠にへだてられた対象領域についての認識の借用が、積極的な意味をもち得ること、すなわち類推の効用をみとめる人もすくなくない。「科学的説明の体系的叙述において、類推や類推的モデルへの言及は、すべてなくて済まされる」ことを強調するヘンペルは類推のもたらす「知的経済」(“intellectual economy”)や、効果的な「発見的」(heuristic)作用に利点をみとめる。(4:440-441)これは現代の「社会システム理論」における類推肯定の考えかたにも、通するのであるが、それについては後段でふれたい。

私は類推の魔術性について、特に初期社会学において見られるそれについて、かつて烈しいいらだちを覚えた。そ

れ以来、半世紀に近い年月が経過した。当時は、類推に比較を対決させ、特に濃厚な歴史性を含む社会現象についての客観的認識の方法論をめざすマックス・ウェーバーの開拓者的な業績が、わが国でも咀嚼、検討され始めた頃である。

#### 四

私は社会学における類推の清算に期待したのである。今世紀に入って間もなく健康回復後のウェーバーは、最終的には社会諸科学の論理学として結実する一連の著述に着手する。そのきっかけは「歴史学派」に属する経済史家たちの歴史ならびに社会についての処論に対する批判による。その標榜とはうらはらに非歴史的な歴史主義者ウィルヘルム・ロッシャーやカール・クニースらに、忌憚のない批判の矢がまずむけられる。いうまでもなくこの批判はそれ自らが目的ではない。ウェーバーは続く数年、彼の社会科学方法論を組立て、推蔽を重ねるのであるが、その構想の前提として、「歴史学派」諸家の考えかたを解きはごし、綿密に検討する必要を感じた。批判を通じてそれらを自説に対決させ、そのことによって積極的に展開される主張を確認しようとするのである。

ところで批判的的として最初に選ばれるロッシャーの「歴史的方法」のうちで、冒頭の科学の基本的類別に関する有名な問題整理に、すぐ続く部分は、ほかならぬ類推にかかわるものであった。しかもこの場合の類推は、初期社会学が共通して陥った社会有機体説的なものである。ウェーバーはロッシャーと初期社会学における「有機体説的」社会学論としての類縁を幾たびか指摘している。(S. 111) ドイツ歴史法学派の思考様式を手本としてロッシャーは原理的に非合理的な、一般原則からは演繹され得ない個性的性格をもつ全体、民族の個々の文化表出が流出して来る實在根拠としての民族精神を信ぜざるを得ない。この「民族精神」の概念は具象的な諸現象の、論理的にはまだ加工されていない多数のものの、仮の容器、すなわち暫定的な名称のための補助概念として、ひとまず置かれるのではな

く、「形而上学的性格をもつ統一的な現実的存在としてとりあつかわれる。」(5:10) 民族は抽象的で内容の貧弱な類概念として考えられてはならないとまず認め、また「有機体」という概念でさえ、無条件に「民族」や「民族経済」を説明するのに用いられることには慎重である。このようにして、抽象によって獲られる類概念にとって代つて、「文化の担い手として意味豊かな全体的存在の具象的な全体性が彼に立ちあらわれる」とウェーバーは見る。(5:11) ところで「この無限に多様な全体性」が論理的に加工されるとき、抽象によって空疎にされるか、或いはその全体性から、その都度、解明される具体的な関連にとって意味のある部分を取り出すか、の二つの道がある。ウェーバーによれば、ロッシャーは「具象的に所与のものの多様性からの類的な方向」への抽象ではなく、『歴史的に』本質的なものの方向への選択が前提であることを知っていた。(ibid.) にもかかわらず「ここで不可避の生物学的類推をともなう『有機体的』社会理論が割つてはいる」(ibid.) とウェーバーは指摘する。すなわち類的なものと、歴史的に本質的なもの、とがロッシャーにとっては同一のものとされ、後者を通じては「歴史のなかで反復的なものそのものが、それだけで意味豊かなものであり得るというような考えかたが生ずる。」そのためたとえば諸「民族」の具象的な多様性を、あたかも生物学者にとつての特定の型の「象」の具象的な多様性と同様に、取りあつかひ得るとする。すなわち諸民族は現実においては人間個体と同様に、たがいに異っているが、この個体差によって解剖学者や生理学者が抽象化を行うのを妨げられないのと同様に、「民族」という類の事<sup>クラッセンザク</sup> 例として取りあつかひ、それらの発展過程を比較して並行関係<sup>パレルリオン</sup>を発見することを妨げるものではない。それらの並行関係の観察を通じて「民族」という類に妥当する論理的部類の「自然法則」が成立するとロッシャーは考える。しかしこれはまさに「生物学的類」としての民族にほかならない。類的存在としての民族は、その発展法則の面においても、個々の生物の発展の仕方になつた定型的で完結的な循環として把握される、ということとを当然前提としている。ところでこのことはロッシャーの見解では、文化発展を示さざるを得ない、すべての民族にとって実際にあてはまることであり、文化国民の興隆、老

成、没落の事実は、表面的には異なる形態をとろうとも、身体的個人の場合と同様に、例外なく展開される過程である。(5:23) 民族のこのような生活現象の一部分としての経済現象も「生理学的」に把握されねばならず、彼の「有機体的」把握の帰結はあげて「国民経済」の構成と発展に適用される。また政治的な組織形態の発展段階は「民族という類的存在がその生活過程のなかで自ら体験するような年令段階なのである。」(5:29)

類的存在としての社会的部類が、個々の生物の発展の仕方にならう「定型的で完結的な循環」すなわちつねに「同一の発展」を示すということは、「天が下、新しいことは何もおこらず、『偶然の』、したがって科学的にはどうでもよい附加物をとまなう古いものの現われにすぎない」、とロッシャー自らがみとめる。これについてウェーバーは「これは明らかに特殊に自然科学的な観察方法である」(5:23) という。社会的発点という側からいえば、まさにその全面的否定の議論である。「歴史主義者」ロッシャーは歴史的に本質的なもの、ないし歴史性そのものを捨て去って、類的なもの、およびその超歴史的な同一性の反復の世界へ転落する。

類推に対するウェーバーの否定的態度は徹底的に辛辣である。ロッシャーも時折、とりあげる並行関係とその比較については、部分的に否定的態度が緩和される。しかしその認識論的意義が全面的に是認されるのではない。「並行関係そのものは単に、多数の歴史的現象相互の、それらのどれかひとつ毎に特徴的であるものの展開にかかわらしめつつ、比較するための手段であり得る。」(5:14) 「語をかえれば、個性的概念の構成のための、多くの可能な手段の一つでもあろう。」「この並行関係がこの目的のため適当な手段であるか、また何時そうなったのか、はつねに問題なのであって、個々の事例についてのみ、決定さるべきである。」(ibid.) その意味と限界についての誤認があれば「並行関係は研究のきわめて悪質な混迷に機会をあたえるし、實際上、そのようなことばかりして来た。」(ibid.) さらに並行関係の助けで獲得された概念や法則を、より普遍的な、より抽象的な概念や法則に従属させるようなことが考えられるならば、それは「問題外であること自明である。」(5:15) とウェーバーは述べる。



ギンター・ロートはウェーバーの比較方法を論評するなかで、後者の類推についての考えかたと用法をとりあげる。ロートは三つの用法、一つは「例<sup>イラスレイテラ</sup>解<sup>エクスプレジツ</sup>的<sup>エクスプレジツ</sup>」で、読者に親しいものを引きあいすることによって特定の現象を視覚化しようとするもの、もう一つは「類<sup>タイプ</sup>型<sup>モデル</sup>論<sup>ジカル</sup>的<sup>シカル</sup>」で、類似現象をよりどころにして類型を定式化しようとするもの、第三に附加的に、或る単一の特性に依存し過ぎて他の内的或いは環境的な諸特徴を考慮しない「行<sup>アクト</sup>い難<sup>ディフフィカル</sup>い<sup>ディフフィカル</sup>」類推を挙げる。(6:81) ここでは類推が概念的に拡大されて、前述の並行関係のほかに類型の設定にまでわたっている。したがって第一に、ウェーバーにおいては類推の概念的限定があり、それについてはつねに厳格な否定的態度があったこと、第二に類推は自然成長的に比較を含む類型論に発展するではないこと、第三に類推の克服こそが類型論の展開の前提となること、ウェーバーの主張について強調されねばならない。社会科学の認識の脱中心化、客観化をめざせばこそ、これに逆行する類推の論理的性格が排撃されたのであるから、ロートの解釈は安易で、誤解に導くおそれがないとはいえない。

## 五

現代社会学において類推はどのような意味をもつのか。今世紀初頭、類推を離脱して社会現象の客観的認識をめざして苦斗の道を歩いたウェーバーの後をうけて、社会学が類推を全面的に清算する期待を伴う当然の権利をわれわれはもつと思われた。しかし事態はかならずしもその方向へ動いているとはいえない。現代社会学の中で、いくつかの理由をもって、代表的と目されるトールコット・パーソンズについて状況を見よう。

一言でいって、パーソンズの機能理論、ないし構造・機能分析の基礎そのもの、集中的には「社会体系」概念に示される均衡的、自然成長的構成が機械論的ないし有機体説的類推に貫徹されているのである。この場合の均衡概念が発生的には物理・化学的な体系をモデルとし、経済における均衡理論とともに力学的なそれであるが、パーソンズ

の場合には、あわせて生理学的な均衡に強く関連することを彼自ら、くりかえし力説するところである。彼の体系概念の最も一般的で基本的な属性は体系内の諸部分間の関係における秩序であるところの相互依存であり、この秩序は均衡の概念にきわめて一般的に表現されている自己維持の傾向をもつ。(7:100) この静止的な均衡のほかに、「進行する均衡」が秩序づけられる変動過程があり、成長によって例証される。パーソンズの体系概念はこのように多分に生物学的モデルと同じ<sup>アイソモρφ</sup>形のものであり、均衡を特定の境界内に維持する傾向に関連して、社会体系とホメオスタシスとの類縁が彼自らによって承認され、多くの人が批判の対象ともする。(8:24) 社会体系が有機体説的類推を軸として、詳細で系統的な概念化が頂点をきわめるのは一九五一年の両主著の刊行である。(7:6) 六〇年代に入ると、一連の進化論に関する諸著述が、これまでの、歴史についての省察の欠落ないし稀薄を補うように発表される。この場合にも社会体系に関する有機体説的類推が転用され、しかもこれらの方法論的基本線が、彼の学者的関歴の最初から固有のものであったことを強調しながら、独自の社会進化論の展開に熱意を示すのである。われわれはそこにパーソンズの生物学的モデルへの傾倒の強さを読みとることができる。

晩年にまとめられた著書に収録された二論文によって、パーソンズは右の傾倒の深化の様子を自伝風にのべる機会があった。それによれば、アムハースト大学の学生時代に受けた生物学的思考の影響は、医学専攻の兄のすすめもあり、進化論への熱烈な讃仰を生む。この傾向はハーヴァードでの恩師L・J・ヘンダーソンの強い感化によって、さらに決定的となる。当時、進化論的思考に対する反対気勢は一般に旺盛で、社会学者や人類学者の中には、同調するものもすくなくなかった。一九二四・五年のイギリス留学はホップハウス、ギンスバークの学風、進化論に傾く著述を通じて、パーソンズの進化論に対する熱意を強化する機会をあたえた。ところで翌年、転出したハイデルベルクで発見するマックス・ウェーバーの残した知的雰囲気は、それに劣らず強烈な印象をパーソンズにあたえる。その場合ウェーバーの歴史社会学的分析の中に彼が見出した進化論的要素が、ウェーバーへの私淑を不動のものにする。しかしウ

ニーバーの歴史を見る見かたは一片の進化論的見解として単純化され得るものではなく、パーソンズの一方的解釈はむしろこれをゆがめるものであらう。前述のようにウェーバーの比較方法による歴史探求は類推の排除を楨杓として展開されるのであって、類推を中心的方法とするパーソンズとはおよそ基本的に、行きかたを異にするのである。いずれにしてもパーソンズの進化論への熱意は六〇年代に入り、豊かな著述活動と結びつく。

類推についてのパーソンズの系統的見解と具体的な諸例を前述の一九七七年刊行の著書の第一論文(10)の中に見ることが出来る。特に社会学者による生物学的「類推」の使用に対するロバート・マートンの否定的な論争的態度についての批判を機縁として展開される。予備的に、「類推」という用語が生物学界では軽蔑的な(pejorative)な語感をともなわないで、たとえば機能において類似しながら、機構において異なる解剖学的諸構造ないし生理学的諸過程の間には、an analogy、すなわち機能上の類似があると主張される。しかしこの機能上の類似とは、ウェーバーの場合の「並行関係」に近い概念であって、論理作用としての類推と現実の類似とは混同されてはならない。パーソンズは適宜、この混同を利用する。次に人間社会に関連して、進化論的知見を利用することに対する激烈な反論が、生物学的進化論についての誤解や無理解、また社会現象の誤った適用に、根拠をおく場合の多いことを指摘する。そのうえで「私は適正に『進化論』と呼ばれ得る次元の注意深い研究なくしては、社会科学は完全ではあり得ないという見解に確信をもって同意する」(10:110)とのべるのである。

パーソンズにおける生物学的類推の最も基本的なものは、彼の四つの基本的機能のパラダイムをめぐって展開される。基本的四機能は社会体系を含むすべての体系に共通にあるのであるから、いずれかの体系の研究が遅れているため、他の体系についての進んだ知識が利用されるという意味での類推があり得るわけである。そこでこれらの機能のそれぞれについて、社会体系と生物学的体系との間に「類推」関係がみとめられる。まず「適応」はダーウィン進化論の基本概念の一であり、一般的には生物科学の概念的武器庫の中心をなすものであるが、同様の重要性が社会体系

の適応機能にまとめられねばならない。「統合」および「目標達成」についても類似の状況がある。(10; 111-112) もう一つの基本的機能「パターン維持」による類推は生物学の側での最近目ざましい研究業績の発展によって、いちぢるしく強化された。それは人間行為領域における「象徴<sup>シンボル</sup>が有機的領域における遺伝子に analogous であるとするアルフレッド・エマーソンの定式化によっても表現される。行動科学における文化の型<sup>タイプ</sup>が種の遺伝的継承にアナログスであると表現する方がよいとパーソンズはいう。(10; 49, 113, 280) いずれにしても遺伝子をめぐり開発された知見は「象徴」や文化の型に転用され得るし、またされねばならないのである。なおこの類推の延長として、生物学的過程としての有性生殖と、外婚制およびインセスト・タブーにより規制される未開部族や一般的に家族を通じての文化の伝承との類推が例として挙げられる。

一九五五年刊行の「家族」巻末に添付された補遺Aは「若干の生物学的類推についての覚え書」として、類推についての系統的叙述を示す。(11) そのでの主張は控え目で、補強のための攻撃的姿勢が見られる。「社会・心理学的分野における、われわれの理論的構成は論理的にも経験的にも、これらの類推をよりどころとするものではなく、自らの脚で自立している。しかし生物学的類推はわれらの理論構成に或る種の示唆的影響をあたえたのである。」(12; 389) そこで列挙される類推の第一は、最初に単純な内化された目的・動機体系として成立って、次いで分化と統合の過程をたどる人格の発達と、まず受精が行われ、次いで卵子の細胞分裂によって増大する生物学的モデルとの間にまとめられる。両者はその胚胎期に不連続の段階を経過する点でも類似する。(ibid.) 第二の類推は上述の遺伝子と文化的伝承の単位とのそれ、第三の類推も第二の延長として前述した。第四と第五の類推は細胞および社会体系のそれぞれの内部における発達過程における類似に関するものである。(ibid.)

これらのほかにパーソンズが指摘または示唆する類推のきわめて多数のものが、著述のいたるところに見られる。或るところでは貨幣がその流通を通じて経済活動をコントロールする機構であるとされるが、これは血液中のホルモ

ンの循環が特定の生理的諸過程をコントロールする機構から類推される。(10:46) 補遺Aの結語として、行為諸科学の生物学からの解放をめざす五〇年の独立戦争の後をうけて、「これら兩者とも理論的基底に共通の概念機構のあることが明らかになるであろう」とのべ、「生物学は学問の共同体における、われわれに一番近い隣人であり、その種の関係が期待されねばならない。われわれは人間知識の同じ大共同体の二つの部門である。」と結ぶのである。(12:399) 生物科学の諸領域における開発を材料として、社会学的問題への転用に、パーソンズがその死にいたるまで、ますます熱情を傾注して従事したことはいうまでもない。

## 六

今日、一般体系理論が統一性のある学際的研究の一として、広い範囲の活発な展開を示していることが思い出される。数多くの学問分野がこの計画に参画して、それぞれの領域での研究成果がもちこまれ、それらはたがいに利用されるわけである。その間に、類推による問題解釈が結果されることは不可避のことであろう。全般的に、この共同作業に関心をもち、寄与している人々が「類推」にあまり警戒心をもちたないか、或いは積極的にこれを利用しようとする傾向が否定できない。典型的な例を挙げよう。一般体系理論の理論的指導者の一人、ルートウィッヒ・フォン・バータランフィは同人ラポポートおよびホーヴァート、ジェフリー・ヴィッカーズの生物学的類推を是認する見解にまず共鳴する。前二者は「現実の組織を有機体と見るのには意味のあることであり、すなわちこの比較が、政治体に関するスコラの思弁に共通の、不毛の比喩的類推である必要のないことを信ずる理由がある。準生物学的機能が組織にあることを立証することができる。組織は自己維持し、ときとして再生産ないし新陳代謝し、ストレスに対抗し、老化し、死滅する。」といい、後者は「制度は成長し、自己修復し、再生産し、衰退、解体する。外的関係において制度は有機体的生命の多くの特徴を示す。内的関係においてもますます有機体化される運命を担い、その協働は細胞統一

にますます近づく」と主張するのである。これらの意見に賛同するバータランフィは「単純な成長法則が社会的統一、都市化、分業などにあてはまるという事実、『有機体的類推』が正しいことを立証する。……力学的、自由な適応的体系のモデルの、歴史的過程への適用は確実に意味をなす。それは単に『生物学主義』、すなわち社会的概念の生物学的なそれへの還元を意味するものではなく、両領域にあてはまる体系原理を示すものである。」(13:30)と強調する。これらの主張はパーソンズの見解に、きわめて似通うものをもつが、一般体系理論の側からも、パーソンズの体系理論が多くの点で同調、賞揚をうける。

ここでわれわれはパーソンズの社会体系概念に対する社会学者で体系理論の立場に立つウォルター・バックレーの批判に注意をむけなければならない。その場合、ホメオスタティクスをモデルとする体系概念を社会体系に適用することが不適当であるとされる。バックレーはそれに適当なものとして、「適応的体系」すなわち、その構成要素が単純で安定的であることもあれば、複合的で変化することもあり、特定の属性についてのみ変異することもある、多数の異なる形態をとることもあり、それらの間の関係が相互的か対立的、直線的か非直線的か、或いは断続的、また因果的効果性の程度において変異的であり得、体系の境界と環境との区別も固定的か流動的、外部からの流入や外部への流出を許容し、全体として停滞と変動もあり得る体系をモデルとするのである。パーソンズとバックレーの、きわめて距離のある社会体系が、一方が生物学的類推に依拠することによって生ずるのであれば、論理作用としての類推の性格に対して、われわれが慎重でなければならないことを意味しているように思われる。

#### 関係文献

- 1 J・ピアジニ、波多野完治訳「人間科学序説」一九七六年、東京
- 2 安西文夫「類推の魔術性」『思想』昭和八年十二月、東京

- 3 安岡大夫「社会科学の発展」一九四九年、東京
- 4 Hempel, Carl G.; Scientific Explanation. 1965, New York.
- 5 Weber, Max; Gesamthe Aufsatze zur Wissenschaftslehre. 1973, Tübingen.
- 6 Roth, Guenther; "Max Weber's Comparative Approach and Historical Typology" in I. Vallier (ed.); Comparative Methods in Sociology. 1971, Berkeley.
- 7 Parsons, T., and Shils (ed.); Toward a General Theory of Action 1951, New York.
- 8 Buckley, Walter; Sociology and Modern Systems Theory. 1967, New Jersey.
- 9 Parsons, T.; The Social System. 1951, New York.
- 10 Parsons, T., "On Building Social system Theory: A Personal History", in Parsons, T.; Social Systems and the Evolution of Action Theory. 1977, New York.
- 11 Parsons, T., "Comparative Studies and Evolutionary Change", in Parsons, T.; Social Systems and the Evolution of Action Theory. 1977, New York.
- 12 Parsons, T.; "A Note on Some Biological Analogies" in Parsons, T. and Bales J. R.; Family. 1955, New York.
- 13 Buckley, W. (ed.); Modern Systems Research for the Behavioral Scientist. 1968, Chicago.

(昭和30年5月24日、本学蔵)